



amiharinomorinoikimonotachi amiharinomori

* 網張の森の生き物たち *

amiharinomorinoikimonotachi amiharinomori

個性が際立つ“ミスジシリアゲ”

日中はまだまだ真夏のような暑さが続くものの、朝や夕方の過ごしやすさで秋が近づいているのを感じ始めたある日、休暇村の本館に続くデッキロードでミスジシリアゲに出会いました。見たところ2cmにも満たない大きさで色見に派手さはないものの、一つ一つが気になる体の形をしていました。体をすっぽりと覆う黒く太い3本の帯が目立つ翅、メガホンを反対に付けたような細長い口、両翅の間からハサミの付いた先がクルリと反り返っている腹部…。小さな体に個性がひしめき合っていて、どこをじっくり見てよいものかわからず、気付けば「翅→口→腹部」の順に繰り返し見ていました。シリアゲムシのオスは、腹部の先を反り上げてサソリのようなポーズをしますが、その先に毒があるわけでも相手を刺すこともないようで、その格好やハサミの意味を考えるとますます不思議です。また、シリアゲムシに最も近いとされる昆虫の仲間は“ノミ”とのこと。「一体どのあたりが？」と合点するにはまだ時間を要しますが、見た目以外にも話題に事欠かない昆虫のようです。他にも細長い口は液体を吸う他にも、口の先端の小さなあごで食べ物を噛み砕くこともできるのだとか。知れば知るほど謎が増えてゆく不思議な昆虫との出会いとなりました。

What is
“Misujishiriage”?

「翅に黒筋3つのシリアゲ」

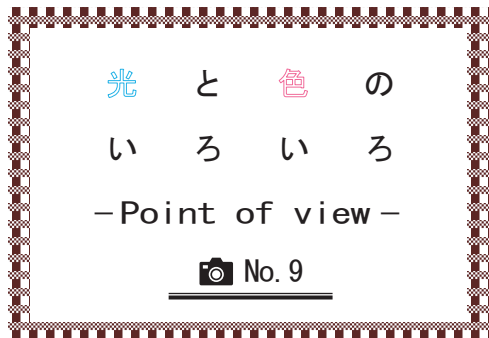
シリアゲムシ科

体長：約 14～18mm

分布：本州、九州

山地の林に棲息し、小動物や昆虫の死骸などを食べる。オスはメスに交尾を受け入れてもらうため、捕えた虫などをプレゼントする「婚姻贈呈」と呼ばれる行動が見られる。中には交尾中のペアから獲物を盗むオスもいる。

(参考図書：「昆虫生活つらいよ研究所」他)



夏から秋にかけて、活発に活動する森林性のコウモリたち

今回ご紹介するのは、これまでにセンサーカメラで撮影されたコウモリの飛翔シーンです。

小型のコウモリは、口から発する超音波を利用して周囲の空間を把握し、飛んでいる昆虫を捕らえます。この能力は、エコーロケーションと呼ばれ、発した音の反射をもとに周囲の状況を立体的に認識する仕組みです。



①20180626 撮影



②20190827 撮影



③20210602 撮影
(降雨時)



④20210908 撮影



⑤20220904 撮影



⑥20230629 撮影



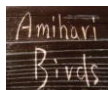
⑦20250829 撮影

エコーロケーションほど注目されることは少ないかもしれませんが、コウモリは夜行性に適した目の特徴も備えています。小型コウモリは明暗や空間の情報を視覚的に捉え聴覚と併用し、オオコウモリの仲間は大きく発達した目で色や紫外線も識別しながら日中も活動します。

コウモリの仲間は、世界で 1,400 種以上確認されており、哺乳類全体と比較しても極めて多様で繁栄している分類群といえます。様々な「隙間」を見つけ巧みに適応する生き方が、コウモリの生存戦略の本質なのかもしれません。

①②④～⑦コテングコウモリ ③不明 同定協力：NPO 法人 コウモリの保護を考える会

参考図書：船越 公威ほか『コウモリのふしぎ』



アミハリ・バース
Vol. 6 5

アオジ

科名：ホオジロ科
全長：約 16cm
生態：一部で夏鳥、
あるいは冬鳥
分布：全国



アオジはスズメよりやや大きな、日本各地で観察できる野鳥です。全体的に黄緑がかった体色が特徴で、オスは目の周りや嘴の付け根が黒っぽいので、メスと見分ける手がかりになります。

漢字では「青鵒」と書きますが、「鵒（しとど）」は、かつてホオジロの仲間を指して使われていた古い呼び名です。古代の日本では「緑」という言葉がなく、緑色も「青」として表現していたため、その名残は「青菜」や「青信号」など、現代の日常語にも見られます。



撮影日：2008年10月12日

ベスト写真で綴る！

「岩手山カレンダー」撮影エピソード（3）

－中山大太郎さん22年の軌跡－

10月「這松の薄化粧」（お鉢から）

撮影日：2020年10月15日



岩手山に登る際は、その日によってお鉢は右回り、左回りと異なりますが、必ず奥宮に寄るようにしています。この日は馬返しからスタートし、先に奥宮に寄る左回りのコースをとりました。頂上を過ぎて、焼走り分岐辺りを少し下がると一面に小さな「エビのしっぽ」ができていました。30分～1時間のずれでしょうか。一番きれいな時間は過ぎていました。朝はもっと真っ白だったのでしょうか。撮影を終える頃には「エビのしっぽ」は見えなくなってしまいました。ここに来るまで解けずに待っていてくれたという思いもありますが、右回りにして先にこちらに来ればよかったとも思いました。ただ、それはここに来てからの考えで、今思い返すと、朝は雲があったため油断して右回りにしたのかもしれない。それでお昼近くの時間となってしまう、失敗したなという思いが残る撮影となりました。

タイトル左の写真（2008年10月12日撮影）は、網張から登り、姥倉山近くまで来た時に山頂に雪が見えた時のものです。雪の写真を撮りたいと半分走るようにして登りました。お花畑から見上げた時はまだ雪がありましたが、屏風尾根に走り着いた時はだいぶ解けていてギリギリ雪が残っている状態でした。この時期の冬の便りの撮影は時間との戦いです。

岩手山の初冠雪は10月中旬頃に報道されますが、早い時期であれば10月7日頃のいわゆる紅葉の時期になると、そろそろ白くなっているかなと期待し出かけます。岩手山北西の松尾側が一番早く雪が降ります。初冠雪報道の前に雪を見たり踏んだりすることはよくあることです。また、登っている途中で15cmくらいの霜柱に出会うと、「こんなに大きく成長するんだ」と感心し、踏みつけるのがもったいないと思いながら登っていきます。冬の装備に切り替えるのはこの頃からです。

11月「不動平初冬」（お鉢への途中から）

撮影日：2016年11月26日

この日は馬返しから登り、8合目の避難小屋からY字分岐を目指し直登しました。好天につい長居してしまった帰り道、沈みかけた太陽にハロ現象が見られました。この時何を撮ろうと思って登ったのか覚えていませんがラッキーな出会いでした。欲を言えば飛行機雲が太陽の中心から出ていればよかったかと、そんな思い出のある1枚です。11月下旬は14時になると9合目は日陰になります。太陽はもう山の向こうです。そうすると柳沢コースは日が当たりません。途中からヘッドランプを装着しての下山でした。

今の人たちから「夜に登るの？」と言われることがあります。ヘッドランプを装着して歩くことは何でもありません。それは若い時に身に付けた習慣や経験によるものだと思います。登山を始めた頃、登山のスタートは夜でした。昼過ぎに滝沢駅を出発し、柳沢の岩手山神社の社務所で仮眠を取り、23



時頃スタートです。ラウ物資（※）の毛布に必要なものを包み両端を縛って斜め掛けに背負います。奥宮に着くと毛布を広げて休憩を取りました。毛布の上に寝転ぶと当時の奥宮はお尻や背中がホカホカと温かく、ご来光の時間を待って山頂へ向かいました。当時は信仰登山で、夜登るのが登山の定番でした。灯はカーバイトのトーチランプ、その後マンガン電池の手提げランプを使っていました。履物は足袋に草鞋です。緒には擦れないように包帯を巻き、奥宮まで1足、新しい草鞋に履き替えて山頂に登り、下りは消耗が激しいため2足、柳沢に戻るまで合わせて3足の草鞋を使いました。皆が草鞋で歩く登山道は、何度か登ってどこに何があるか分かるということもありますが、オーバーに言えば麓から目を瞑っても登れるくらいとてもよかったです。草鞋は登山道に優しく、登山道は今よりとても歩きやすく掘られていないきれいな道でした。今はストックや登山靴によって掘られてしまい、雨が降るとそこがきっかけで土が流れてしまいます。人の背丈ほど掘られている場所もあり、石柱の根が露出している場所もあります。草鞋がいかに登山道に優しくなかったか思い出します。

※ラウ物資：アジア救援公認団体またはアジア救済連盟が提供していた日本向けの支援物資（参考：ウィキペディア）

